平安時代貴族住宅の研究

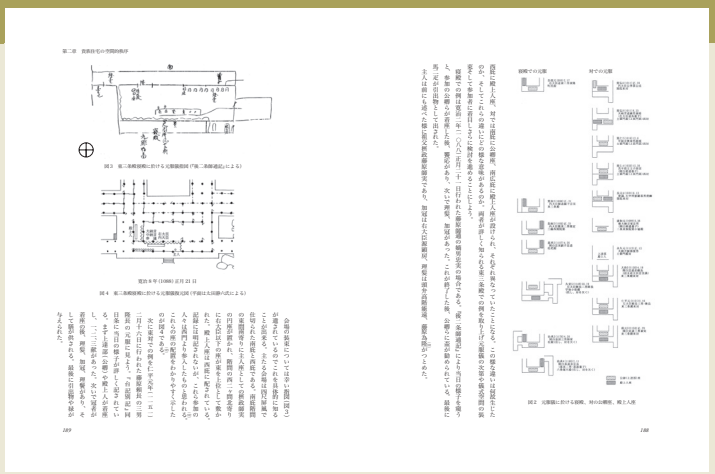
飯淵康一 著

中央公論美術出版

本書は、平安時代貴族住宅で行われた儀式に着目し、これがどの様に展開されていたのかを空間的観点から解明することによって、平安時代貴族住宅を日本住宅史の中に位置づけようとしたものである。また同時に平安宮内裏及び平安京をも対象とし、平安時代貴族住宅の空間的性質をより深く論じている。

序より

平安時代貴族住宅の儀式時に於ける空間的性質について導かれるのは以下の様なことであろう。それは「礼」の向きの不確定性と「晴」の場の不特定性、そして配置構成・平面規模の成立・変遷過程に対する儀式時の用法の不関与性である。即ち、同じ住宅に於ても寝殿での「礼」向きで代表された貴族住宅の「礼」向きは必ずしも東西のうちの一方に固定されず、また「晴」の場は寝殿のみならず特定の対に限定されることはなかった。そして住宅の左右非対称化、特に対の平面規模成立に対する儀式時の用法の直接的影響を認めることも困難であった。このような平安時代貴族住宅の空間的性質には、一町四方の敷地の東西両面に正門を開き、また寝殿の東西に対を持ちこれらそれぞれに中門廊を付属させるという典型的姿に見られるようなこの時代特有の配置方式が大きく関わっていたものと考えられる。しかしながら平安末期になると東西対のうちの一方が失われ、これに伴い寝殿での「礼」の向きは一方に固定するようになる。平安末期には寝殿と東西対のうち残された対での儀式的秩序の向きは共に同一方向を示す様になった。そして門の用法もこれと対応し東西のうちの一方が正門として用いられるようになる。また主人の降殿口は中世にかけ南階から中門廊へと次第に移っていったのである。



古代的儀式と近世的接客・対面儀式を同一面上で論じることは出来ないものの、そしてさらに様々な観点からこれらについて検討していく必要があるものの、筆者は古代平安時代から近世江戸時代に至る日本住宅の歴史は、これらが行われた複数の「晴」の場同士間の秩序化と、これらそれぞれに於て成立する「礼」即ち儀式的秩序の向きの一方向への収斂化、という新たな秩序空間成立への過程として、換言すれば、寝殿や東西対をそれぞれ中心とする多核的秩序、大局的には寝殿を中心とする同心円的秩序から、玄関を経て奥方の御座間に至る一方向の線的秩序体系成立への過程として説明できるのではないかと考えている。そしてこの様な住宅史の流れは「晴」と「礼」の概念を明確にし、峻別することによって初めて説明が可能となろう。

目次

序

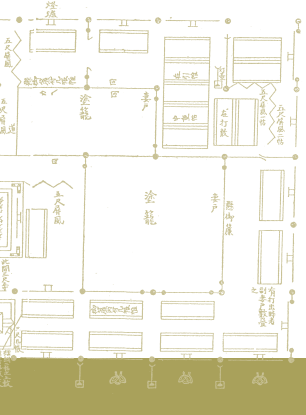
第一章　平安宮内裏の空間的秩序（一）
　第一節　平安宮の儀式空間
　第二節　宮城門、内裏門の性格と平安宮内裏の空間的秩序

第二章　貴族住宅の空間的秩序
　第一節　平安時代貴族住宅の空間的秩序
　第二節　平安時代貴族住宅の変遷
　第三節　元服会場としての寝殿及び対

第三章　里内裏時に於ける貴族住宅の空間的秩序
　第一節　内裏様式里内裏住宅の空間的秩序
　第二節　平安時代里内裏住宅の空間的秩序（一）
　　－紫宸殿、清涼殿の割り当てと寝殿に於ける儀式－
　第三節　平安時代里内裏住宅の空間的秩序（二）
　　－陣口、陣中及び門の用法－
　第四節　門の用法の史的検討

第四章　平安時代貴族住宅に於ける「礼」及び「晴」
　第一節　平安時代貴族住宅に於ける「礼」及び「晴」
　第二節　大饗・臨時客と「礼」概念
　第三節　平安時代貴族住宅に於ける「礼」向き決定の諸要因

第五章　中世住宅への変遷過程
　第一節　貴族住宅に於ける「出居」、「公卿座」
　第二節　行幸時に於ける貴族住宅の出入口
　　－院御所、女院御所への場合－
　第三節　院の御幸時に於ける貴族住宅の出入口
　第四節　南北朝貴族住宅の出口及び乗車位置
　　－洞院公賢の用法－



推薦のことば

広く都市的文脈から究明された住宅史研究

藤井 恵介（東京大学大学院助教授）

平安時代の貴族住宅―いわゆる寝殿造―の研究は、ここ二十年ほどで飛躍的に進んだ。もともとあった寝殿造の復元的研究の大きな蓄積を基礎にして、近年の研究はもっぱら、そこで行われる儀礼の分析を通して、寝殿造というものが一体どのような住宅・施設であるのか、それをどのように理解すればよいのか、という方向へと進んだのである。飯淵康一氏はこの方向で精力的な研究を進めた主たる論客の一人である。

飯淵氏の研究の大きな特色は、建築の内部の細かな分析へと収斂していくのではなく、平安京と言う大きな都市の文脈のなかで貴族住宅を理解しようとしたことである。住宅建築内部に関わると思われた課題の多くが、広く都市内部の位置や利用法などから解ける問題であることを積極的に示そうとした。

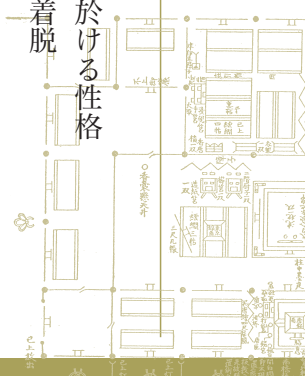
住宅を説明する時、「晴（ハレ）」と「褻（ケ）」という、儀式と日常生活を対比させる有名な分析概念があるが、氏は新たに、「礼」という東西方向の空間秩序概念を持ち込み、平安京図の中に、多くの寝殿造の「礼」といの向きを図示して見せた。また、天皇が寝殿造を臨時に御所「里内裏」として使用する時、その外側の広い領域を内裏に例えて「陣中」と呼んだことも指摘している。住宅固有の現象と思われていた事象を、広く都市的な文脈で捉えなおす試みが、各所に見受けられる。

しかしながら残念なことに飯淵氏の提出した幾つもの新しい視点は、後の研究において必ずしも十分に再検討をされてこなかった。今回、長年の研究が一書に纏められて、容易に全体を一望することができるようになった。この出版を契機に、新たに多数の読者を得て、平安時代住宅史さらに日本の住宅史の研究が進展することを期待したい。

第五節　貴族住宅に於ける主人の出口
―変遷過程及びその要因―
第六章　平安宮内裏の空間的秩序（二）
第一節　平安宮内裏、承明門・日華門の儀式時に於ける性格
第二節　紫宸殿上に於ける天皇及び公卿らの沓の着脱
―儀式時の検討―
附　節　近世内裏の空間的秩序
第七章　平安京に於ける空間認識
第一節　太白神による方忌み
―平安京及び貴族住宅から見た―
第二節　大嘗会御禊點地に於ける方角認識の基点
―東西間距離から見た『兵範記』仁安元年十月十五日条の解釈―
附　論
第一節　平安時代に於ける方違行幸
―目的地として用いられた住宅―
第二節　藤原師実の住宅と儀式会場
―藤氏長者・摂関家の儀式会場の変遷過程について―
第三節　平安時代に於ける儀式と雪
―様々な対応について―
図表一覧
後　記
英文目次

用いた主な史料

儀式書…内裏儀式、内裏式、儀式、北山抄、西宮記、江家次第、他
日　記…小右記、権記、御堂関白記、左経記、春記、水左記、康平記、帥記、後二条師通記、中右記、長秋記、永昌記、殿暦、兵範記、台記、山塊記、吉記、玉葉、玉蘂、明月記、花園天皇宸記、園太暦、他
百練抄、本朝世紀、日本紀略、類聚国史、他



書　名　**平安時代貴族住宅の研究**　■ 2004 年 3 月刊■

著　者　飯淵　康一（いいぶち　こういち）

サイズ	B5 判
ページ数	640 頁
図　表	106 点
体　裁	上製本・函入り
定　価	（本体 35,000 円＋税）

ISBN4-8055-0452-8 C3052

著者略歴

東北大学教授
1946 年　宮城県生まれ
東北大学工学部建築学科卒業
東北大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程単位取得退学
東北大学助手、同助教授、同教授（工学部）を経て 1997 年から同教授（大学院工学研究科）、現在に至る。工学博士。

本書の特色

＊平安時代貴族住宅の研究において、その平面規模の復元という従来の研究にたいし、本書はその使い方（用法）を明らかにするという観点はもとより、広く都市的文脈を究明する中から貴族住宅の性質の解明に取り組み、住宅史研究に新たな局面を切り拓いた。
＊多角的な新視点を設定することにより、貴族住宅を立体的に捉え、日本住宅史を古代から近世に至るストーリーとして見る新たな指標を提出している。
＊建築学のみならず、日本史学、庭園学、等の関連雑誌等にも掲載され学際的研究として注目されている。古代、中・近世の建築史、文化史、美術史、国文学などの研究者、愛好者、研究機関・図書館必備の書。

【関連書籍】

類聚雑要抄指図巻　川本重雄・和泉和子編　縦 257×327mm　402 頁　定価（本体 46,000 円＋税）
ISBN4-8055-1344-0
本書は平安時代に作成された官家や公家の様々な行事の式次第を記録した『類聚雑要抄』と、それをもとに描いた絵巻からなる。平安時代の宮廷の具体的な生活が、建築・家具・食物・衣服・工芸・習俗など多方面に亘って解明される。

源氏物語 —その住まいの世界—　池　浩三著　A5 判 356 頁　定価（本体 9,000 円＋税）
ISBN4-8055-0182-0 C3052
本書は『源氏物語』の舞台となった寝殿や対屋、また神秘的な機能をもった塗籠などの建築的背景を、プロットの流れと多くの登場人物の内面世界とのかかわりにおいて解明しようと意図した建築史家による源氏学の学際的研究の成果である。

中央公論美術出版
http://www.chukobi.co.jp
〒 104-0031　東京都中央区京橋 2-8-7
電話 03-3561-5993　FAX 03-3561-5834

お取扱いは